プログラム・ノート

柴田克彦

シュニトケ：チェロ・ソナタ第1番

アルフレッド・シュニトケ(1934～98)は、ユダヤ人の父とドイツ人の母のもと、旧ソ連に生まれた作曲家。10代のはじめをウィーンで過ごし、1948年モスクワへ移住。やがて「多様式主義」と呼ばれる作風を確立したが、当局の批判を浴び、ソ連時代の終盤は出国を禁じられた。しかし1980年代後半から国際的な評価が高まり、91年にはドイツ国籍を取得してヨーロッパで活動。生涯に約250曲の作品を残し、その多くが現代音楽の枠を超えた支持を得ている。

本作は、1978年に作曲され、同国のチェロ奏者ナターリャ・グートマン(1942～)に献呈された。曲は、先輩ショスタコーヴィチのヴァイオリン・ソナタ(1968年作)を彷彿させる、緩―急―緩の構成。政治的な抑圧が強い時期に書かれたこともあってか、怒りや不安が込められた重い作品となっている。**第1楽章**(ラルゴ)は、チェロの独白に沈んだピアノが続く瞑想的な音楽。**第2楽章**(プレスト)は、緊迫感を湛えて激しく疾走し、グロテスクなワルツが挿入される。**第3楽章**(ラルゴ)は、チェロが慟哭(どうこく)の歌を奏でる長いフィナーレ。

プロコフィエフ：チェロ・ソナタ ハ長調 作品119

旧ソ連を代表するウクライナ出身の大家セルゲイ・プロコフィエフ(1891～1953)は、1930年代半ばに、ロシア革命後移っていた西欧からソ連へ戻り、尖鋭的な作風から比較的明快な作風に移行した。本作はその延長線上に位置する晩年の所産。

プロコフィエフは、1947年に同国の名手ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ(1927～2007)の演奏を聴いて感銘を受け、2曲のチェロ作品を残している。その1つであり、唯一のチェロ・ソナタである本作は、医師から仕事を制限される中、ロストロポーヴィチの協力を得ながら作曲され、1949年に完成された。曲は、最低音のC線を開放弦として使用できるハ長調ならではの安定感と明快な抒情性を湛えており、楽章ごとにテンポを上げながら、変化に富んだ音楽が展開される。

第1楽章(アンダンテ・グラーヴェ)は、「穏やかに表情的に」とロシア語で付記された荘重な音楽。低音の第1主題と抒情的な第2主題を中心に進む。**第2楽章**(モデラート)は、作曲者のバレエ音楽を思わせるスケルツォ。機知に富んだ主部に流麗な中間部が挟まれる。**第3楽章**(アレグロ・マ・ノン・トロッポ)は、明朗なフィナーレ。2つの主題を軸に進行し、壮大なクライマックスに至る。

(しばた かつひこ・音楽評論)